

令和 元年 6 月 13 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04553

研究課題名(和文) 就学前施設における家族レジリエンスを高める子育て支援プログラムの開発と検証

研究課題名(英文) A study about development of parents support program to enhance family resilience in early childhood facilities

研究代表者

松井 剛太 (MATSUI, GOTA)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：50432703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、就学前施設における家族レジリエンスを高める子育て支援プログラムの開発と検証である。保育所でポートフォリオを使用した実践を行った後、保護者を対象にアンケートを実施した。その結果、以下の2点が示唆された。第1に、多くの家族では母親がコメントを記述していたが、父親、きょうだい、祖父母も記述に加わった。母親がポートフォリオを読む際に、それに気づいた他の家族成員とのコミュニケーションが生じていると考えられた。第2に、家族が保育に対する理解を深めたことによって、保育者と家族の間に肯定的な子ども理解が共有された。ポートフォリオを使用した保護者連携が家族レジリエンスを高めることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、保育の質の向上において重要な要素と考えられる保護者連携の方法を提示したことである。ポートフォリオによって保育を可視化することで、保護者の保育参加や子育ても含めた保育の質の向上に寄与するものと思われる。

社会的意義については、就学前施設における子育て支援により、幅広く子育て初期の保護者の育児不安軽減や虐待の予防に寄与することである。ポートフォリオを使用して、子どもの育ちを保育者と保護者が喜び合いながら家族レジリエンスを高めることで、家族関係の中で子育ての問題が解消されることが期待できる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to try and develop of parents support program to enhance family resilience in early childhood facilities. A questionnaire was distributed to parents after a trial in a day care center. Our findings indicate two points. First, mothers wrote most of the family voice in portfolios but fathers, siblings, and grandparents also provided comments. When the mothers read it at home, other family members noticed this and had communication among families. Second, participants started to better understand their day care centers' education and care. This facilitated a shared positive understanding of children between teachers and families. In conclusion, portfolios are valuable tools to enhance family resilience.

研究分野：保育学・幼児教育学

キーワード：ポートフォリオ ラーニングストーリー 家族レジリエンス 就学前施設 子育て

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

レジリエンスは、「逆境にも関わらず立ち直るか、うまく対処する力」と定義され、パーソナリティとは異なり、周囲からの支援によって変化する特性とされている。それを家族に適用した家族レジリエンスは、「家族成員間での相互理解」や「家族内の凝集性」を鍵概念にし、家族が有している強さや問題解決能力を指す。

国外では、保護者と就学前施設との良好な関係が家族レジリエンス、さらには地域社会のレジリエンスを高めることが示され、注目されてきている。とりわけ、保護者が就学前施設の実践を理解し、保育者とともに子どもの発達を肯定的に受容することにより、「家族成員間の相互理解」及び「家族内の凝集性」(一つの物事に共に向かう態度)が促され、家族レジリエンスを高めることが報告されている。具体的な取り組みとして注目されているのが、子どもの成長の記録をポートフォリオにして保護者と共有する実践である。ニュージーランドでは、就学前施設における教育成果の評価方法として、ラーニングストーリーが実施されている。これは、就学前施設における子どもの生活履歴をファイルにしたものである。これを保育者と保護者が協同で作成することによって、保護者が就学前施設の実践を理解し、保育者とともに子どもの成長記録を共有することができる。

### 2. 研究の目的

幼稚園・保育所・認定こども園(以下、就学前施設)は、子育て初期において家族が抱える問題を早期に発見・対応することができる場である。そういった問題を解決するにあたり、家族が有している強さや問題解決能力を指す家族レジリエンスが注目されている。近年では、ポートフォリオを通じて保育者と保護者が連携することで、家族レジリエンスを高める効果が報告されている。本研究では、就学前施設においてポートフォリオを使用し、家族レジリエンスを高めることを目的とした子育て支援プログラムの開発と検証を行うことを目的とする。

### 3. 研究の方法

保育所にて、ポートフォリオを試行し、保護者を対象としたアンケートを実施した。対象者は、0歳児クラス(子ども10名:保育者4名)、1歳児クラス(子ども14名:保育者3名)、2歳児クラス(子ども12名:保育者3名)の計36名の子どもとその家族である。アンケート項目は、家族レジリエンスに関連するものとして、次の3点とした。第1に、「ご家庭にポートフォリオを持ち帰ったとき、どなたが見ていますか?見ている人すべてにをつけてください」と教示し、母・父・祖母・祖父・きょうだい・本人・その他で選択してもらった。第2に、「ポートフォリオを見て、誰とどのような会話をしていますか?具体的にお書きください」とし、ポートフォリオを介した会話の内容について回答を求めた。第3に、ポートフォリオを始めてから、自身の子どもに対してどのような変化があったかを調べるため、「ポートフォリオの取り組みを始めてから、あなたのお子さんに対する見方や関わり方に変化はありましたか?」として、16項目のうち、よく当てはまる5項目までを選択可能な複数回答式で尋ねた。

### 4. 研究成果

#### (1)アンケートの結果から

##### ポートフォリオを見ている人

ポートフォリオを見ている人を尋ねた回答の結果は次のとおりである。母親は全員(100%)、父親は32名(94%)がポートフォリオを見ていた。続いて、きょうだいが17名(48%)、本人15名(42%)、祖母14名(40%)、祖父6名(17%)、その他で叔母1名(2%)の順であった。このうち、本人については、年齢が上がるにつれて見ている人数が増えており、0歳児クラスで1名(10%)、1歳児クラスでは5名(38%)、2歳児クラスでは9名(75%)がポートフォリオを見ていることがわかった。

##### 家庭内での会話とその内容

会話の相手は、父親、母親とも配偶者の割合が高かった。特に、0歳児クラスでは、父親は7名(87%)、母親は9名(100%)が回答しており、ともに配偶者を主な会話の相手に行っていることがわかった。1歳児クラスでは、父親は8名(66%)、母親は6名(54%)、2歳児クラスでは、父親は2名(28%)、母親は6名(54%)であった。1歳児クラス、2歳児クラスの回答では、0歳児クラスに比べて配偶者の割合は低かったが、本人が会話の相手になる割合が増えていた。1歳児クラスでは、父親は4名(33%)、母親は5名(45%)、2歳児クラスでは、父親は5名(71%)、母親5名(45%)がポートフォリオを通して、本人と会話をしていたことがわかった。きょうだい、祖母に関しては、父親よりも母親が会話の相手とする割合が幾分高かった。祖父は、ポートフォリオを見ている人の回答には少数あったが、会話の相手としては自由記述内には出てこなかった。

次に、家庭内での会話の内容について、両親の回答が揃ったものを整理した。0歳児クラスでは、家族全員で対象児のことや保育園のことを話題にすること、夫婦2人で子どもの成長を感じることを、祖母も含めて父親、母親、きょうだいがポートフォリオの内容をもとに本人に話しかけるといった相互作用があることがわかった。1歳児クラスでは、姉と母で主に話をする、夫婦間の会話だけでなく祖父母への報告に使用すること、家では見られない保育園での

様子を本人に聞いて話をすること、先生の対応も含めて楽しく話すといった家族内のやりとりがあった。2歳児クラスでは、本人が自ら家族に向かって保育園での出来事を報告する様子が見られた。また家族間で本人ができるようになったことを中心に具体的に話していることがわかった。

#### 父親と母親の子どもに対する見方や関わり方の変化

ポートフォリオの共同作成を通して、父親と母親の子どもに対する見方や関わり方がどのように変化したのか、該当する選択肢を上位5つ以内で選択してもらった結果に関して、父親、母親別に検討した。

全体で最も多かったのは、「子どもの成長を家族みんなで喜べるようになった」であった。父親は26名(76%)、母親は28名(80%)が選択した。これは父親、母親別に見ても最も多い回答であった。次に、「できるところ(光っているところ)を見つけられるようになった」が多く、父親では13名(38%)、母親では23名(65%)が選択した。続いて多かったのは、「保育園でやっていることを家でもやってみようになった」であった。父親では10名(29%)が選択したが、母親では25名(71%)が選択しており、父親、母親間で差が見られた。「ほめる機会が増えた」が次に多く、父親が15名(44%)、母親が17名(48%)であった。続いて、「子どもの発達に興味を持てるようになった」で、父親が11名(32%)、母親が12名(34%)と双方とも3割程度の選択であった。

父親と母親別に見てみると、選択の多かった順に特徴が見られた。父親の上位5つを順に示すと、「子どもの成長を家族みんなで喜べるようになった」、「ほめる機会が増えた」、「できるところ(光っているところ)を見つけられるようになった」、「子どもの発達に興味を持てるようになった」、「子どもの話を聞くようになった」(10名:29%)、「保育園でやっていることを家でもやってみようになった」であった。一方、母親は、「子どもの成長を家族みんなで喜べるようになった」、「保育園でやっていることを家でもやってみようになった」、「できるところ(光っているところ)を見つけられるようになった」、「ほめる機会が増えた」、「子どもの発達に興味を持てるようになった」であった。また少数意見からも、「一緒に遊ぶ機会が増えた」は父親が7名(20%)であるのに対して母親は0名であったように、父親、母親の間でポートフォリオによる影響は異なることが示唆された。

父親、母親に共通して、子どもの成長を家族みんなで喜べるようになったことがわかった。父親の回答からは「ほめる機会が増えた」、「子どもの話を聞くようになった」、「一緒に遊ぶ機会が増えた」といったように、ポートフォリオを通して子どもと関わるきっかけが作られたことが示唆された。一方で母親は、「保育園でやっていることを家でもやってみようになった」、「できるところ(光っているところ)を見つけられるようになった」など、保育園の保育方法や子ども理解に影響を受けたことが推察された。

#### (2)プログラムの開発

ポートフォリオを通した子どもの育ちの可視化と保護者との共有化によって、家族全体で子どもの育ちを喜び合う下地ができ、家族レジリエンスの向上に寄与することが示唆された。一方で、デジタル化したポートフォリオにおいては、閲覧に対する利便性が上がる一方で、閲覧が2極化する傾向があることや、コメントが少なくなる傾向があった。

デジタルポートフォリオの閲覧で嬉しい内容は、自分の子どもの体験であり、他の子どもやクラスの活動に対する関心は多くなかった。そして、自分の子どもを褒める機会が増えた(52%)、自分の子どものできるところを見つけられるようになった(48%)、自分の子どもの新たな一面を見つけられるようになった(46%)など、自分の子どもの理解や関わりに一定の変化は認められた。また、家族レジリエンスに関連する項目について、家族の間で互いに愛情を感じられるようになった(46%)、家族の間で連帯感が増した(48%)、というように心理面での変化が一定程度見られた一方で、家族が共に過ごす時間が増えた(20%)については、割合が低く、行動での変化はあまり見られない結果となった。

本研究全体を通して、ポートフォリオを使用した連携が子どもの育ちを家族全体で喜び合う一助になることが明らかになったものの、保育者の手作りや手渡しのほうがすべての家族に効果が行き渡ることが示唆された。デジタル化することのデメリットを解消するための工夫が必要である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

松井剛太・片岡元子・水津幸恵、保育所の子育て支援におけるポートフォリオの活用 - 保護者の記述内容の分析を中心に -、幼年教育研究年報、査読無、40巻、2018、23 - 31

〔学会発表〕(計1件)

松井剛太・片岡元子・水津幸恵、保育所におけるポートフォリオが子育てへ与える影響、日本保育学会第71回大会

〔図書〕(計1件)

丸亀ひまわり保育園・松井剛太、ひとなる書房、子どもの育ちを保護者とともに喜びあう：ラ  
ーニングストーリー はじめの一步、2018、135

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (2)研究分担者

研究分担者氏名：松本 博雄

ローマ字氏名：Matsumoto Hiroo

所属研究機関名：香川大学

部局名：教育学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：20352883

### (2)研究分担者

研究分担者氏名：片岡 元子

ローマ字氏名：Kataoka Motoko

所属研究機関名：香川大学

部局名：教育学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：40709242

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。